

---

# 瘴気(しょうき)

猫目石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瘴気しじょうき

### 【Nコード】

N0122T

### 【作者名】

猫目石

### 【あらすじ】

奈落の分身、夢幻の白夜が繰り出した瘴気まみ塗れの蛇に琥珀と邪見が噛まれた。

特別の薬草を飲ませなければ命が危ない。

りんは薬草を分けてもらいに半妖の地念児の許へ行く。

邪見が毒へびに噛まれた。

琥珀とかいう、以前、奈落の手先に使われていた小僧の巻き添えを喰ったのだ。

忌々しい！

私が、りんに注意した舌の根も乾かぬ内にこのような面倒に巻き込まれおつて。

奈落の分身、夢幻の百夜の放った瘴気に満ちた毒へび。

毒消しの薬草を飲ませねばなるまい。

小僧が死のうが生きようがどうでもいいが、りんが放っては置くまい。

それに、どうやら百夜が小僧を拉致しようとしたのは奈落にとって利用価値があるという事なのだろう。

仕方がない、阿吽に乗せて移動させるか。

りんが邪見と小僧を乗せた阿吽の手綱を操りながら尋ねてきた。

2

「殺生丸さまつ、地念児さんの畑に行くの？　いつか、邪見さまが毒虫に刺された時、薬草を教えてくれた人の所だよね？」

確かにあそこへ行くしかあるまい。

少々の毒ならば普通の薬草で間に合うだろうが。

奈落の瘴気が仕込まれた毒では、あの半妖が栽培している特製の薬草でなければ効果が無からう。

阿吽と並ぶように空を往く殺生丸の鼻腔に不快な臭いが風に乗って来る。

小僧・・・琥珀とか言う名であったか。

まだ少年とはいえ、人間の男。

りんが、しきりに気に掛けていているのも気に入らぬ。

そもそも、あ奴は奈落に操られて一度りんを殺そうとした。

白霊山では洞穴に迷い込んだりんを逃がそうとしたらしいが。

ともかく、動けるようになり次第、犬夜叉達の処にでも厄介払いした方が良いだろう。

邪見には・・・治ったら百叩きの罰をくれてやる！

あ奴まで嘔まれなければ小僧を地念児の畑まで連れて往かせたものを。

りんを小僧の側に居させる必要も無かったものを。

役立たずめ！

殺生丸は先程から己の心中に湧き出してくる感情に翻弄されていた。未だ曾かつてないような激しい苛立ち。

このような気持ちは経験した事が無い。

その感情が嫉妬と呼ばれる類のものである事を殺生丸は知らない。数百年の彼の生において、そのような感情を持つ必要が一度も無かったが故に。

薬草畑の中に一軒だけポツンと建っている掘立小屋が地念児の家だった。

阿吽を畑の外に留めると、りんは素早く降り立ち小屋に向かって走りながら殺生丸に叫んだ。

「殺生丸さま、りん、薬草を分けてもらってくるから！ 邪見さま達を見ててねっ！」

私が、こ奴らをか？

邪見は瘴気が効いてきたのか、まだ意識はあるようだが青息吐息の状態だ。

小僧の方は意識を失ったままだ。  
りんが入り口に掛けられた筵むしろを上げ、中を覗きこむと、以前と同じく山姥やまんばが居た。  
横には大きな体の妖怪が。

(この人が地念児さんかな?)

以前、りんが薬草を分けてもらいに来た時は布団に潜り込んで出てこなかった地念児。

その為、地念児がどんな姿をしてるのかサツパリ判らなかった。

今、目の前にいる半妖は形なりこそ大きいが全く危害を与えるような雰囲気がない。

(優しそうな人だな)

そう感じたりんは地念児に向かって頼み込んだ。

「こんにちは、千年草の実を分けてください。毒にやられて死にそうな人がいるのっ」

「おめえ、以前、来た童わらしでねえか」

山姥が、りんに気が付いて声を掛けた。

「前に来た時は千年草を覚えてくれて有り難う。おかげで邪見さまは元気になったの。でも、今度は毒へびに噛まれちゃって。それに、

もう一人いるのっ!」

「確か、邪見とやらは妖怪だと、おめえ、言っただだな。もう一人の方も妖怪か?」

「ううん、もう一人は人間なの。毒へびに噛まれてから目を覚まさないの」

「妖怪と人間、おめえも忙しい童わらしじゃな。どっちに惚れてるんじや?」

山姥やまんばが前に来た時と同じ『惚れる』という言葉を使った。あの時、りんは、全然、意味が判らなくて後で邪見に聞いてみた。しかし、その言葉を聞くなり邪見に「絶対、その言葉を使うな!」と言われてしまった。どうやら意味は(大好き)と同じらしい。

「どっちも好きだよ。だから死んで欲しくないの」

大真面目に答えるりん。

「何と、まあ、二股かけてるのか?」

どうあっても山姥は『惚れる』に拘りたいらしい。

「二股？ 二股って何？」

りんには又しても良く判らない言葉だった。  
流石に自分の母親に呆れた地念児が、言葉を挟んできた。

「おつかあ、その娘っ子には、まだ早すぎるだ。 それに早く薬草を用意してやらねば」

「何を言う、地念児。 小さくても女子は女子じゃ。 かくいう、わしだって、お前の親父殿と恋をした時は、この娘っ子よりは年嵩じゃったが、うら若い乙女であつたぞ！」

山姥が当時の事を思い出したのか皺くちやの頬をポツと赤らめながらフツと溜め息を吐いた。  
りんには、益々、訳がわからなかった???

「もうっ、そんな事は、どうでも良いから。 早く千年草を分けて欲しいの！」

「グズグズしてたら、邪見さま達が死んじゃうかもしれない！」

必死になって頼むりに、地念児が優しく答える。

「安心するだ。丁度、昨日、取ってきたばかりの分があるだ」

「本当、有り難う！ でも、琥珀は気を失ってるの。どうやって、飲ませればいいのかな？」

それを聞いていた山姥が歯の欠けた口でニイツと笑って教えてやった。

「そりゃ、勿論、口移しじゃな」

「口移しって、どじやるの？」

「薬を口に含んで相手の口に流し込むのよ、うひゃひゃっ」

「ふ〜ん、それでいいの」

純真なりんには、今ひとつ良く判っていないらしい。

薬草をもらって当座の宿にしている打ち捨てられたお堂に戻ってき



たりん。

邪見には、直接、薬草を手渡した。

以前と同じように自分で千年草を噛み砕き大急ぎで飲み込む邪見。

りんは山姥やまんばに教えられた通りに琥珀用に薬草をすり潰し液状にする。

その薬草汁を口に含み、りんが口移して琥珀に飲ませようとした、正にその時、殺生丸が堂内に入ってきた。

「……何をしている!？」

「あっ、殺生丸さま!」

「あっ、あのね、琥珀が気を失ってるから、こつやって飲ませれば良いつて教わったの」

「やめる!」

「へっ、何で????」

りんには、何故、止められるのか判らない。

「……鼻を摘んで口を開けさせれば良かるっ」

「あつ、そうか！　そう言えばそうだね」

これを契機に殺生丸の機嫌が著しく悪くなったのは云うまでもない。

因<sup>ちな</sup>みに邪見は回復してから殺生丸にボツコボツにされたそう<sup>な</sup>。  
了

2006・5/24（水）　作成

(後書き)

《第五作目「瘴気」についてのコメント》

この作品「瘴気」は、奈落の分身、夢幻の百夜の放った瘴気に満ちた毒へびに噛まれた琥珀と邪見が、その後どうなったか？を妄想して作成しました。

殺りんファンなら誰もが想像した事でしょう。

アニメに出てきた地念児と、その山姥母さんに出演してもらいました。

あの『惚れる』が、どうしても使いたかったので。(笑)( ) ^

o ^ ( ) (笑)

2006・8/9(水)

猫目石

当時のコメントです。

地念児の母、あのキャラクターは実に強烈な印象を残します。

あの女だからこそ妖怪と恋をして子供を産めたんだろうと思います。

かごめに似てるかも。

あの、かなりのミィハーというか下世話なところが。

逆境にあっても決して挫けない強さと包容力も。

きっと若い頃は強くて明るい娘さんだったのでしょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0122t/>

---

瘴気（しょうき）

2011年7月9日04時53分発行